

令和6年度 個人視察派遣報告書

長野市立信州新町中学校 宮川友梨

1. 視察目的

- (1) 外国語科の教員として、自分の英語力やコミュニケーション能力に自信をつけるため
- (2) 個別最適な学び・多様な生徒の学びを認める学校のシステムを視察するため

2. 視察地・視察校

ニュージーランド ロトルア

Beststart Lynmore/Mokoia Intermediate School/Rotorua Lakes High School/Lynmore Primary School

3. 視察内容及び示唆されたこと

本報告では、今回の研修に参加する動機に関わって、(1)外国語科の教員として考えたこと・感じたこと、(2)個別最適な学び・多様な学びという2つの視点から考えたこと・感じたことを述べていきたい。

(1) 外国語科の教員として今回の研修を通して考えたこと・感じたこと

① 現地でのコミュニケーションから

今回の研修期間中、私は、現地の受け入れ校の一つであった Lynmore Primary School で働く Lisa さんの家庭でお世話になった。ホームステイする中で、彼女や彼女の家族と何度もコミュニケーションをとる機会があった。しかし、期間中、考えていることや伝えたいことがうまく伝わらずもどかしい気持ちになったことは一度もなかった。それは、私の英語力の問題ではなく、Lisa やその家族のやさしさにあったと考える。ニュージーランドで出会った皆さんは、私たちのつたない英語でも受け取ろうと熱心に聞いてくれたり、うまく伝わらなかったときには聞き直してくれたりした。反対に、彼女の言葉がうまく伝わらなかったときには、もう一度話してもらったり、言い換えてもらったりした。このように、やり取りの中でより深く理解するために工夫する力が、私はコミュニケーション能力であると考えます。普段の授業づくりにおいて、私は、目的や場面、状況に応じた言語活動に取り組むことができるように単元構想等を意識して行っている。今回の研修での現地の方々とのコミュニケーションを通して、改めて、「相手のことをもっと知りたい」「自分のことをもっと相手に伝えたい」という気持ちがとても重要であることに気付いた。裏を返すと、どれだけ英語の文法の知識があっても相手のことを理解したい、自分のことを理解して欲しいという気持ちがなければ、コミュニケーションは成立しないと考える。文法の正確さや、語彙の量は、大人になってからでも、いつでも、学び直したり学び足したりすることができると思う。小中学校の外国語教育において最も大切なことは、相手への興味や関心をもって人と関わることの魅力を伝え、その有用感を味わうことだと考えた。



【Lisa さんにジンギスカンを紹介する様子】

② マオリ文化の教育の様子から

滞在期間中に感じたもう一つ重要な点は、文化の教育についての違いである。ニュージーランドには、マオリという先住民族の文化がある。特に、私たちが訪問したロトルアという地区は、マオリ文化が深く根付いており、訪問した学校のあらゆる場面でマオリ語やマオリの文化に触れることができた。学校での歓迎の式では、子供たちによるハカを見せていただき、ハカを練習する授業にも参加させていただいた。また、教師が子供たちに対してマオリ語で指示を出したりする場面があったり、Te Kohanga Reoと呼ばれるマオリ語とマオリ文化に特化した保育園も存在したりする。一方で、Lynmore Primary Schoolに通う子供たちの中には、ニュージーランド以外にルーツがあると思われる子も多くみられた。このような、多文化社会の中でも、自文化であるマオリ文化を大切にしている子供たちの姿がとても印象的だった。昨今の日本の多文化・異文化教育は、「自分とは異なる色々な文化を大切にしましょう」という考えだけが先行しているように感じ、どこか違和感を覚えていた。相手の文化を大切にすることの前に、自分の文化を正しく理解し、大切にすることがあってこそ、多文化・異文化教育というものは花開くのではないかと考える。今回の研修を通し、私は一層日本のことが好きになった。日本語の豊かさや、日本文化の奥深さには唯一無二の良さがあると思う。私は、外国語科の教師として、自国文化である日本文化を正しく理解し尊重しつつ、他の文化も尊重できるような外国語教育・異文化教育について考え、取り組みたいと考えている。



【ハカで女性が使う「ポイ」の扱い方の授業】

(2) 個別最適な学び・多様な学び

近年「個別最適な学び」や「多様な学び」という言葉が度々聞かれる。今回のニュージーランドでの授業参観を通してこれらの学び方について考えたことについても述べたい。

今回、year0 から year13 までのいろいろな子供たちが学ぶところを参観させていただいた。ニュージーランドでも一斉授業が行われ、ドリル的な活動も行われている。もちろん、探究型の学習を進める場面もあるが、すべてがそうというわけではない。つまり、日本と同じように部分ごとに使い分けている。このような点では、「日本と同じだ」と感じた。一方で、学んでいる雰囲気の違いは確かに感じた。それは、子供たちや先生が自分に合った学習を選ぶことに対して認め合う雰囲気があることである。例えば、year0 や year1 のような幼児クラスの子供たちは、スキル別に6人程度のグループに分けられており、グループごとで順番に先生から呼ばれて、読み書きの指導を受けていた。それ以外の時間は、自習をしたり遊んだりしている。ふと、自分が担当している小学校の外国語の授業を振り返った。私は書く活動を行うとき、ガイドありのワークシートとガイド無しのワークシートの2種類を用意している。しかし、「簡単な方を選ぶのは嫌だ」という理由でガイド無しのワークシートを選び、思うように活動に取り組めなかった児童の姿を思い出した。このように自分が取り組みやすい方を自由に選択することに抵抗を感じる子供たちの背景には、どのような違いがあるのだろうと感じた。教員側が学び方の多様性を認め、多様な学び方を想定し、用意しておくことも必要だが、個別最適な学び・多様な学びを進めるには、子供たち自身の自己理解や自己開示も重要だと考える。日本で私が出会ってきた子供たちと、ニュージーランドで出会った子供たちの背景の違いを今の段階で明言することは難しいが、ニュージーランドでの経験をもとに、今後、子供たちが安心して自分に合った学び方を選択できるような環境づくりについて考えていきたい。

4. 終わりに

今回の海外研修では、まだまだ教員経験の浅い私にとって、多くの出会いに恵まれた、とても貴重な時間になった。日本で、ニュージーランドで出会ったすべての方に感謝をお伝えしたい。今回の研修では、ホームステイという形で多くの方とコミュニケーションをとる機会をいただき、海外旅行とは違った経験ができたことで、漠然と抱えていた英語力やコミュニケーション能力への不安を払拭することができた。今回の経験やつなかりをこれからも大切にし、今後の教育活動に活かしていきたい。



【授業をしたクラスでの集合写真】